

OF の意味

岸 野 英 治

1. はじめに

我々は次の文を何の困難もなく正しく理解することができる。

(1) the rise *of* the sun

(2) a statement *of* the facts

これは(1)の基底には The sun rises., (2)には Somebody states the facts. という文があり, (1)のofは主格関係を, (2)のofは目的格関係を表していることを直感的に理解するからである。ここでは of は語(句)と語(句)とを結びつけるいわゆる虚語 (empty word) として機能している。反面,

(3) the door *of* the room

(4) a beautiful dress *of* silk

において of はそれ独自の意味内容を伝達し, それぞれ所属, 材料の意を表している。このように of には具体的意味を失い単なる機能語として機能する場合と, それ以外に何らかの意味内容を伝達する場合とがあるが, 本稿では文法的意味を表す場合は一応除外して, of が本質的にどのような意味を持っているかということを探りその特質を考えてみたいと思う。

2. of の分類

of は前置詞の中でも最も意味的価値の希少な前置詞であり, かつその意味

は互いに交錯するため明確な分類は困難だが、ここでは現代英語の観点から何らかの共通的な意義を持つと考えられる項目をまとめ、その分類に従って of の意味を調べてみたいと思う。¹⁾

- (1) 分離 ———— [a. 分離・剥奪・除去
b. 時間
- (2) 根源 ———— [c. 根源・起源
d. 原因・理由・動機
e. 材料・構成要素
- (3) 所有 ———— [f. 所属・所有
g. 記述
h. 同格
- (4) 部分 ———— [i. 部分
j. 時の部分
- (5) 関連 ———— k. 関連
- (6) 文法的意味 ———— [l. 主格関係
m. 目的格関係
n. 動作主

3. 1. 分離の of

of は元来は分離 (separation) の意味を表し、古代英語で単純属格形 (simple genitive form) に代わるものとして生まれた。Curme (1931: 75) によれば、

1) He walks in the strength of God.

において、of を用いた表現のほうが -s 属格を用いた in God's strength よりも、より高い次元からの力を得て歩くという観念が生き生きと表現される

1) (6) は of が具体的意味を失い単に文法的意味を表す場合で、本稿では扱わないことにする。また(1)b. は、アメリカ英語で、It's five minutes to six. のとに代わって of が用いられるようになったものでここでは扱わない。

と述べている。このように of 属格は表現をより具体的・分析的なものにし、分離・根源の意味を一層はっきり表現するものとして -s 属格に代わって用いられるようになった。この分離の意味の of は今日次のような慣用表現において残存している。

north (south, east, west) of; within...of; upwards of; wide of;
back of; in front of; irrespective of; independently of

この of はまた clear, cure, ease, heal, deprive, relieve, rob などの除去・剥奪・救済などの意味を表す動詞とともに用いてその除去されるものを示す。また bare, clear, destitute, devoid, empty, free, rid, short などの形容詞と用いて欠如・分離の意を表す。

- 2) On the afternoon of Harry Barnfield's funeral the wind rose greyly, mild in sudden rainless squalls, across a landscape bare of leaves. — H. E. Bates, *Death of a Huntsman*
- 3) When it did end he turned helplessly on the floor, arms still outstretched, very much like a child learning to walk and suddenly deprived of a pair of helping hands. — *Ibid.*
- 4) I'm beginning to believe they can cure you of anything and everything. — S. Bellow, *A Father-To-Be*

このように今日では分離の意を表す of の用法は比較的限られているが、この意味は次の根源 (source) の意へと受け継がれている。

3. 2. 根源の of

3. 2. 1. 起源

Potter (1950: 23) は今日残存している化石化した表現の中に John of Salisbury (ソールズベリーのヨアンネス) の of をあげているが、この起源を表す of は NWD が men of Ohio の例をあげていることから明らかなように今日でも用いられるが、通例地名と用いて出所を表す場合は from がよく

用いられる。

- 5) With them had gone the two American ladies, school-teachers from Ohio, who had become ill, as Miss Bentley had firmly predicted they would, from living too much on ice-water, green salad and uncooked pears. — H.E. Bates, *A Month by the Lake*

一方, of は,

- 6) I knew my friend's daughter-in-law, a delightful young woman of impeccable breeding. — P. McGinley, *Manners Are Morals*
 7) She was herself German, penniless but of noble birth; . . .
 — W. S. Maugham, *The Summing Up*
 8) She came of a noble family. [AD]

などの例に見られるように血筋・血統・家柄などを表す場合に用いられる。つまり from が単に場所を起点ととらえて「…からやって来た」という意味を表すのに対し, of は内在的・本質的なものをとらえて「土地・家系の血を受け継いでいる」という意味を含意していると言えよう。このことは次の例において一層明らかである。

- 9) The young Japanese men of Hawaii, together with some from the "relocation centers," also formed an all *nisei* military unit, which fought for the United States with extraordinary heroism, suffering the highest rate of casualties and winning the most decorations of any American unit. — E. O. Reischauer, *The Japanese*

ここで the young Japanese men of Hawaii は「ハワイ出身の日系青年」の意味で, 文意から彼らは二世である。つまり from ではなく of を用いたことによって単に出身地としての場所だけではなく, そこで生まれ育ったという内容まで言及しているわけである。このように根源・起源の of は出身を表

す意味において内在的なものを表すことは注目される。次の例において come of は “arise from” の意味で、上のような of と from の差異はない。

- 10) On the other hand, most Westerners that I have met in Japan find Japanese methods of discussion long-winded, and cannot believe that anything constructive can *come of* them.—A. Turnery, *A World of Difference*

今日ではこの起源を表す of は ask, beg, demand, expect, inquire, require, request などの動詞と用いて動作の起こる起源、いかえれば動作の及ぶ対象を表す。

- 11) “Do you know how long ago that was?” Jacques *demanded of* me. “It was two years ago.”—N. Mailer, *The Patron Saint of Macdougall Alley*
- 12) “I *beg of* you,” Adam’s brother said to the maggid, “to pray for my sick son.”—N. Mailer, *The Locust Cry*

3. 2. 2. 原因・理由・動機

起源を表す of が die, perish; taste, smell などの動詞や afraid, proud, ashamed, glad, sick などの形容詞と結びついて、その行為や動作の原因・理由を表す。ここでは die との関連で of の特質を考えてみたい。

手元にある英英辞典²⁾を調べてみると、of の場合には、

grief, hunger, an illness, a disease, a fever, thirst, a malady, old age, shame

from の場合には、

a wound, inattention

2) OED, OALD, LDCE, Web³

の目的語を与えている。このことから一般に言われているように、of は直接的原因、from は間接的原因を表す場合に用いられると言うことができようが、Cowie & Mackin (1975: 79) は以下に示すように上に述べたとは全く逆と考えられる実例をあげている。

13) Climbing parties marooned in the open can easily *die of* exposure unless they know the proper precautions to take.

14) The disease *from* which he *died* was at that time incurable.

こうしてみると of と from の差異は単に表面的にみた目的語の種類によって決定されるのではなく、むしろ文脈の中でその目的語がどのようにとらえられているかということによっていると考えられる。この of と from の異同を考えるにあたり、小西友七著『英語シノニムの語法』(P. 198) の中に適切な用例が載せられているのでそれを借用させていただく。

15) "I haven't made a complete examination yet, but she doesn't seem physically injured in any way. There may be some internal injury. Might be shock, I suppose." "But you can't *die of* shock," I said. —A. Christie, *Endless Night*

16) She'd start warning Ellie and frightening her, making her feel that she was in danger. I thought it might make it seem more possible than that Ellie had *died from* shock. —*Ibid.*

2例とも shock という同じ目的語を取りながら of と from が使い分けられている。ここで文脈から判断されることは、of を用いた15) の例では shock は内部的 (internal) なものとしてとらえられているのに対し、16) ではあくまでも外部から加えられたものとしてとらえられているということである。このことを敷衍 (ふせん) して言えば、die of では死亡の原因を本質的・近因的なものと考えているのに対し、die from では外部的・遠因的なものとしていことである。したがって、たとえば wound は通例外部的なものであるために die from a wound と表現されるが、その外傷も死に直接結びつくも

のである場合には *die of wounds*³⁾ のように *of* を用いて表現されるのである。以上のことから、*of* は「外部的なものではなく内部の本質的なものを表す」と言うことができるであろう。この原因・理由を表す *of* は *of necessity*, *of one's own will*, *of one's own accord* などの成句表現においては行為の動機を表す意味で用いられる。

17) On her mother's birthday, Betsy did the dishes *of* her own accord. [DAI]

18) I can only approve the man who makes an end of himself *of* his own will when life has nothing to offer him but pain and misfortune. —W. S. Maugham, *The Summing Up*

3. 2. 3. 材料・構成要素

of は「作る」を意味する動詞と用いて材料を表すが、この場合、厳密には、(i) 構成物を作り上げている成分 (constituents), (ii) 材料 (material) を表す場合とがある。それぞれの場合を実例で示すと、

19) We *made* sandwiches *of* the baloney and French bread and began to eat. —W. Saroyan, *The Three Swimmers and the Grocer from Yale*

20) The cups were *of* thin china, fancily flowered, with high handles. —H. E. Bates, *Night Run to the West*

19) では *of* はサンドイッチを作り上げている構成物としての成分を表し、20) ではコップという製品の材料を表している。特に問題となるのはこの(ii)の場合で *from* との比較においてである。よく取り上げられる例に、

21) The bridge is *made of* steel.

22) Wine is *made from* grapes.

3) F. T. Wood, *English Prepositional Idioms*, P. 59.

があるが、21)では bridge は steel (鋼鉄) というもとの形をとどめており、22)では wine は grapes (ぶどう) の原形をとどめていないことから一般に「材料がもとの形状をとどめている場合は of を用い、材料が全く姿を変えてしまう場合は from」と説明されるが、どこまで形状をとどめているかという問題は絶対的なものではなく明確にその基準を示すことは困難である。事実、Shoes are made *from* (or *of*) leather. のようにどちらとも判別がつかない場合は from, of の両方が区別なく用いられているのが現状のようである。ただし of と from の基本的な意味を理解することは重要である。of はその根底に根源の意味を持っていることから材料は変化を受けてもその実体・特性は失わないで維持されるものと考えられる。それに対して from は起点をもとにして分離を表すことから材料は変化したり加工されたりするものと理解される。このことが上のような用法上の差異となって現れるのではないかと考えられる。ただし下の例のように from がもとの材料をそのまま表している場合もある。

23) Now Second Avenue is a dismal street, made *from* scraps and ends; part cobblestone, part asphalt, part cement; and its atmosphere of desertion is permanent. —T. Capote, *Miriam*

この材料・構成要素を表す of は比喩的に a man *of* steel (鉄のように固い人), a heart *of* stone (石のような心) のようにも用いられる。もちろんこの場合 from は用いられない。

3. 3. 1. 所有・所属

所有を表す of はもともと単純属格形に代わるものとして生じたもので、今日では原則として -s 属格は有生物, of 属格は無生物に用いるというふうに区別されている。しかしながら、有生物の場合でも the hero's courage, the

4) cf. 小西友七「英語の前置詞」P. 342.

courage of the hero; *my father's house, the house of my father* のように -s 属格と併存して of 属格の形も用いられ、それぞれの用法に何らかの相違があると考えられる。まず音声の面からみると、*the hero's courage* を例にとれば、イントネーションは原則として *the hère's cóurage, the cóurage of the héro* となり、強勢は -s 属格では *courage* に、of 属格では *hero* に置かれる。またこのことは情報の焦点も原則としてそれぞれ *courage, hero* に置かれることを意味する。したがって、文脈に応じて -s 属格か of 属格かの選択が行われることになる。意味的には、通例 -s 属格では強い所有の観念を表すため *hero* (英雄) と *courage* (勇氣) は一体的なものとしてとらえられる。これに対し of 属格の of は “in the sphere of, in the nature of” の意味を持ち、「英雄という人の中にある勇氣」ぐらいの意味で、いわば部分と全体という2つの概念を同時に表現したものと言えよう。それだけに -s 属格と比べると所有の観念は薄いということになる。

次に2重属格 (double genitive) と呼ばれる構造について考えてみたい。これは *a friend of my father's* に見られるように of 属格にさらに -s 属格が用いられたために一般にこのように呼ばれる。この構造についての特徴はまず最初に不定の名詞がきてそのあとに定指示を表す名詞がくるということである。ただし *that wife of yours* のように最初に *this, that* が用いられることがあるが、この *this, that* は親密さ・嫌悪などの感情的色彩を添える働きをし、厳密な意味では限定指示の働きをする指示代名詞ではない。この of の意味については諸説があるが、Jespersen (MEG. III. 1.5₃) は、この of は直接に結びつけることが困難なあるいは不可能な語を結合する文法的装置、つまり虚語 (empty word) と解している。そしてこの of にはっきりとした意味を与えるならば “who is” “which is” として、

a friend of mine = a friend who is mine (my friend)

no money of mine = no money which is mine

that nose of his = that nose which is his

のように解釈している。いずれにしてもこの2重属格は、最初に of の意味が

もたになって作られた構造ではなく、この種の表現全体のもつ表現力といったものが直截（せきせつ）な表現を好む英語国民の性格ともうまくマッチし、また英語の分析的傾向とも合致したために、次第に英語国民の中に自然な英語として根をおろすようになったのではないかと推察される。Shakespeare から Queen Victoria 時代にかけて *this our life, this sudden death of his* のような言い方が平行して使われていた時期があると言われるが、後になって後者の形式のみが生き残ったことからそのことがうかがえる。この種の表現が現代英語に占める意義は次のような点にあると考えられる。

(1) 最初に不定の概念を導入することによって直接的な断定を避ける

24) He was the most important person present, and I could see that his silence bothered our hostess, who was *an old friend of mine*. — E. Seidensticker, *Japan to Me*

この場合、特定の友人を表す *my old friend* とは違って、まず最初に不定の名詞句を導入したことによって複数人いる友達の人だということを示す。このことから初めて話題にのぼせる場合などによく用いられる。

25) It might also have seemed, from the snap in her voice, that she was not very tolerant of forgetfulness. But fortunately neither surprise nor forgetfulness were *habits of his*. He was never surprised and he never forgot the gin. — H. E. Bates, *Death of a Huntsman*

ここで *his habits* と表現すれば特定の習慣を表すことになるが、*habits of his* と言うことによって習慣の一部を表し、断定を避けた表現になっている。

(2) *this, that, some* と用いて感情表現を成すことができる

26) He looked round the room to make perfectly sure, for a second time, about its emptiness. "Has everybody gone?"

5) 小林光『前置詞の研究』P. 59.

“Everybody gone?”

“I thought it was a party.”

“Party?” she said. “Whoever said it was a party?”

“Valerie.”

“Oh! my little girl,” she said. “*That little girl of mine*. My silly little girl.” — *Ibid.*

上の例で、まず最初に“my little girl”と言ったあとで“that little girl of mine”と言い直し、そのあとさらに思い直したように断定的に“my silly little girl”と言っている点、感情の山はちょうどピラミッド型のようにまん中の表現にあるようである。そして *that little girl of mine* の *that* はそのあとで発した言葉からもわかるように *silly* (ばかな) という意味を間接的に含み、いかにも感情を含めた表現を成している。このように *this*, *that* を *of* 句の前に立つ名詞に用いることによって驚き・当惑・賞賛・不快などの感情的な含みを微妙にかつ端的に表現できる点にこの種の2重属格のもつ特徴があると言えよう。

3. 3. 2. 記述

of は所有の意味を表すことから人または物に本来備わっている性質・特徴を表す。この *of* は通例先行名詞についてその性質を記述することから一般に「記述の *of*」(*of of description*) と呼ばれる。

27) Jacques is a gentleman *of considerable culture*; as a representative French intellectual it is somewhat intolerable to him to pass through experience without comprehending it rationally.
—N. Mailer, *The Patron Saint of Macdougall Alley*

28) It was impossible to say how many people, from all sections of society, from villagers to men *of title* had come to pay tribute to Harry Barnfield, . . . —H. E. Bates, *The Grapes of Paradise*

ここで重要なことは、この *of* は人または物に本質的に存在すると考えられる

属性を示すことである。たとえば上例の 27) では「親の血を受け継いで教養豊かな紳士」という含みがあり、28) では「代代称号を受け継いでいる人たち」というニュアンスがある。これに対して同様な意味を表す *with* と比較すると、*a girl with an angry look in her eyes, a man with brown hair* の例からもわかるように、*with* では随伴という意味が強い。

この「記述の *of*」は限定的に用いられることが多いが、叙述的に用いて人や物の性質・特徴を述べることもある。この場合、現代英語では *of* が省略されることが多い。

29) He is now nineteen and *of* average height. —N. Mailer,
The Patron Saint of Macdougall Alley

30) "I've been thinking about starting in college lately, even if I
am *this age*." —B. Malamud, *The Assistant*

31) Everything about him was old except his eyes and they were
the same color as the sea. —E. Hemingway, *The Old Man and
the Sea*

3. 3. 3. 同格

of が人または物の性質を表すことから *of* が同格の観念を表すと考えられる。たとえば、*the City of York* の *of* である。この表現の発達の経路について中島文雄氏は、York is a city → ⁶⁾the city is York → the city which is York → the City of York と説明されている。*OALD* はこの *of* を特に同格を表す *of* とは考えないで「記述の *of*」の項目で分類している。このように同格の意味を表す *of* は人や物事の性質・特徴を表す「記述の *of*」と緊密に関係している。下の例なども同格を表す *of* と考えられる。

the Republic *of* Korea, the county *of* Kent, the game *of* tennis,
a charge *of* murder, the title *of* Duke, the crime *of* larceny,
the virtue *of* charity, the pleasure *of* meeting you

6) 中島文雄『英語の構造(下)』p.145.

同格を導くと考えられるもう1つの構造, 即ち *an angel of a woman* (天使のような女性) の型の *of* については材料・構成要素を表す *of* (cf. *OED*) との見方もあるが, *a woman who is an angel* の関係にあり, 同格を表す *of* ないしは「記述の *of*」(cf. Wood, P. 59) とも考えられる。類例に,

a palace of a house, a beast of a man, a fool of a person, a mountain of a wave, a fine figure of a woman, a wilderness of a place, a hell of a day, a devil of a fellow

など成句化した表現が多い。以上のような点から同格の意味を表す *of* もその根底において物事の性質・特徴を表していると言うことができる。

3. 4. 1. 部分

部分を表す *of* は所有を表す *of*, 構成を表す *of*, 分離の *of* と密接に関係している。この部分の意味の *of* は *some of the meat, part of the problem, members of the team, three of the boys* などの例に典型的にみられるが, これ以外に主として次のような場合に用いられる。

(1) 度量・単位・種類を表す名詞とともに

a pint of beer, a piece of paper, a foot of water, an acre of land, a yard of cloth, a lump of sugar, a bar of chocolate, a pound of butter, a delicious kind of bread, etc.

(2) 比較級・最上級のあとで

32) *In those days it seemed the less badly damaged of the two.*

— E. Seidensticker, *Japan to Me*

33) *He is the most dangerous of enemies.* [OALD]

(3) 強意的に

the King of Kings, the Song of Songs, the Holy of Holies,

the Book of Books, etc.

(4) 独立して副詞的に

34) It surprises me that you, *of* all men, should be so foolish.

[OALD]

以上の用法において *of* は単に部分の意味のみを表し特に問題はないが、語法上興味を引くのは *drink*, *partake* などの動詞と結びついた場合における *of* の意味である。この場合、一般に *of* は部分の意味をもっていると説明される。たとえば、*drink of* の *of* について *OED* は “a portion of, one of, some of, some” とみなしていることからもうかがえる。しかし、常に部分の意味だけを表すかといえはそうとは限らないようである。次の例はペペが疲労困憊(は)した馬に小川の水を飲ませてやる場面である。

35) The path went into the stream and emerged on the other side.
The horse sloshed into the water and stopped. Pepé dropped his
bridle and let the beast *drink of* the running water.

— J. Steinbeck, *Flight*

ここで文脈から判断されることは、部分という外的規定として水をとらえたものではなく、水を「のどの渇きをいやしてくれるもの、腹を満たしてくれるもの」ととらえ、水の本質的な特性を表したものではないかと考えられる。つまり *of* が用いられたことにより水の冷たい舌ざわり・その味など、水のもつ微妙な感じが表現されており、*drink the running water* ではこの水が本来的にもつ特質はうまく表現されえないのではないかと思われる。それだけに *drink of* は微細な意味の綾(あ)を表し精密な表現になっていると言えよう。このように *of* は物事の本質的な特質を表すことから *drink of* は比喩的にも用いられる。たとえば *drink deep of flattery* の例のように用いるが、これはお世辞の内容をじっくり考えるという意味である。*partake of* の *of* についても同様に部分の意味のほかにも物事の性質・特徴を表すと考えられる。これは

RHDC の “to have something of the nature or character” という定義からも明らかとなろう。下の例もこのことを如実に示している。

36) There would be all of us there — Jody and Loosh and Ringo and me on the edge of the bottom and drawn up into a kind of order — an order *partaking not of any lusting and sweating for assault or even victory, but rather of that passive yet dynamic affirmation which Napoleon's troops must have felt* — . . .

— W. Faulkner, *Ambuscade*

このように部分を表すと考えられる of にもその背後に物の性質・特徴を表すという意味が潜んでいることは注目に値する。

3. 4. 2. 時の部分

37) What do you do *of* a Sunday? [OALD]

38) I often go and have a swim *of* a summer evening. [Hill]

このように of は不定冠詞を伴って曜日・午前・午後などを表す名詞とともに用いられるが、この of について OED は “at some time during, in the course of, on” と定義し、また COD⁶ も *of an evening* において “at some time in the evenings” と定義していることから、この of は時の部分を表す of と考えて差しつかえないと思われる。そして上例からもわかるようにこの種の表現は習慣的行為を暗示する文脈で用いられることが多いようである。それというのも of が部分の意味を表すため、時間を漠然とある幅をもつものととらえ、しかも of の次にくる不定冠詞 a は通例 any⁷⁾ の意味を表すためであると推測される。ただし下の例のように 1 回限りの行動・行為を表すこともあるが、この場合、不定冠詞 a は a certain の意味を表していると考えられる。

39) He died *of* a Monday. [Web³]

40) They arrived *of* an evening. [RHDC]

7) O. Jespersen, *Essentials of English Grammar*, P.177.

3. 5. 関連

関連, つまり「…について, 関して」の意味を表す *of* は根源の意味を表すことから生まれたのではないかと推察される。たとえば, *speak of what I experienced* では「経験したことに基づいて話す」の意味で, また, *feel guilty of murder* において「罪を感じる」とは, 「犯した殺人が原因で罪を感じる」ということである。この関連を表す *of* は種々の動詞・形容詞(及びそれから派生した名詞)とともに用いられる。たとえば下のような動詞・形容詞とである。また(3)のようにほぼ固定した成句的な表現としても用いられる。

- (1) *accuse, approve, assure, conceive, convict, dream, hear, inform, know, speak, suspect, talk, tell, write, etc.*
- (2) *aware, certain, confident, critical, fond, guilty, ignorant, innocent, mindful, reminiscent, sure, true, etc.*
- (3) *hard of hearing, nimble of wit, quick of eye, slow of speech, strong of arm, swift of foot, young of heart, etc.*

今日では *about* が *of* の領域に進出する傾向がみられ, たとえば *tell, speak, talk, inform* について Quirk (1972: 331) は *of* を用いるのは幾分まれで文語的としている。しかしこういった傾向とは別に, *of* と *about* は意味的な違いを伴って用いられるということも事実である。たとえば *think of* と *think about* は次のような意味的な違いがある。

I thought of the matter. = I brought the matter to my mind.

I thought about the matter. = I considered the matter.

この意味の相違の背後にあるものはもちろん *of* と *about* の基本義の差異である。つまり *of* が周辺的なものは無視してそのものの内容に言及するのに対し, *about* は内容つまり問題の本質的なものよりはむしろそれにかかわりある周辺的なことを具体的に表す。このことが *think of* と *think about* の意味の違いとなつてあらわれると考えられる。このように *of* は周辺的なものではなく内容の本質的なものを表すため, しばしば具体的な意味を失い単に物事に軽く言及することがある。たとえば, さきほど述べた *think of* も *think*

of A as B という形で用いると of は全く具体的な意味を失って単に考えると
 という行為の対象を表しているにすぎない。

- 41) After leaving the Navy Language School, I still *thought of* the Japanese language *as* no more than a way to get through the war.
 ——E. Seidensticker, *Japan to Me*

また of が hear, know という動詞と結びつくと、about とは違い具体的な意味は表さず単に「(直接ではなく間接に) 聞いている、知っている」という軽い意味を表すだけである。

- 42) I did not until later *hear of* instances in which a writer refused permission to have a novel published. ——*Ibid.*

(3)の場合の成句的表現においても of は本質的・機能的なものを表していると考えられる。

- 43) . . . he thinks of that riderless Norman steed which galloped against the Saracen Emir, who, so *keen of eye*, so delicate and strong the wrist which swung the blade, . . .
 ——W. Faulkner, *Carcassonne*

上例の *keen of eye*(目が鋭い)とは、具体的には視力というそれ本来の機能を表している。ところが単に場所を示して右目・左目という場合は of ではなく in を用い、*keen in the right (or left) eye* のように表現される。

4. おわりに

本稿では取り上げなかったが *It's very kind of you to come.* の of も文法的には意味上の主語の働きをしていると考えられるが、意味的には人の行為の特質(この場合来てくれたということ)を表し、また同時に人の性質(親切であること)を表し、この2つの観念を同時に表現したものと考えることができる。いいかえれば、of はその人の行為にかんがみて人の性質を表現し

ていると言うことができよう。以上、of の意味を分類し、その根底に潜む of の意義を考えてみたが、その多岐にわたる意義の背後に共通の意味——いわゆる意義素 (sememe)——を見つけることはほぼ不可能であろう。しかしながら基本義として多くの場合、〈人・物・事柄の nature・quality・substance〉を表すと言うことはできると思う。このことによって語法上明らかになる問題も少なくないはずである。

REFERENCES

- The Concise Oxford Dictionary of Current English*. 1976. London: OUP. [COD*]
- A Dictionary of American Idioms*, revised by A. Makkai. 1975. New York: Barron's Educational Series. [DAI]
- Cowie, A. P. & R. Mackin. 1975. *Oxford Dictionary of Current Idiomatic English*. London: OUP.
- Curme, G. O. 1931. *Syntax*. Boston: Heath.
- Hill, L. A. 1968. *Prepositions and Adverbial Particles*. London: OUP. [Hill]
- Hornby, A. S. 1977. *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. Tokyo: Kaitakusha. [OALD]
- Jespersen, O. 1909-49. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. 7 volumes. London: George Allen & Unwin.
- , 1933. *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 1978. London: Longman. [LDCE]
- The Oxford English Dictionary*. 1928. London: OUP. [OED]
- Potter, S. *Our Language*. 1950. Harmondsworth: Penguin.
- Quirk, R. et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- The Random House College Dictionary*. 1975. New York: Random

House. [RHDC]

Thorndike Barnhart Advanced Dictionary. 1974. Glenview: Scott, Foresman. [AD]

Webster's New World Dictionary of the American Language. 1970. New York: World. [NWD]

Webster's Third New International Dictionary of the English Language. 1961. Springfield: Merriam. [Web³]

Wood, F. T. 1967. *English Prepositional Idioms*. London: Macmillan.

小西友七, 1976.『英語の前置詞』東京:大修館

———, 1976.『英語シノニムの語法』東京:研究社

小林 光, 1950.『前置詞の研究』東京:篠崎書林

中島文雄, 1980.『英語の構造(下)』東京:岩波書店